

ヨーロッパ博物館視察記 VII

Survey Reports of the Museums in Europe VII

間 多 善 行
Yoshiyuki MADA

パリ 1

8月17日、長い旅も終盤に入って、今日はロンドンにお別れを告げていよいよ最後の根拠地パリへ移動する日である。パリでの滞在は7日間、その間にブリュッセルを訪れ1、2泊する予定である。今度のパリ行きは飛行機でなく、鉄道でドーバーまで行き、連絡船でドーバー海峡を渡って、カレーからパリまで更に乗り継ぎ、飛行機なら1時間そこそこ着くところを9時間かけて弥次喜多道中を張ろうというわけである。

朝10時30分ヴィクトリア駅を出発、ロンドンの市街地を離れるのに20分位しか、かからなかったように思う。日本の車窓風景と根本的に違うところは、日本の東海道線であれば、どこで眼を上げて車窓を眺めても多かれ少なかれ人家・工場等が必ず眼に入るが、ここイングランドは牧草地と林が主で、人家はお目にかかる方が少ない。従って風景が単調だから自然と本を読むようになってしまう。しかし、人家のあるところは楡の木らしい木立があって、コンスタブルの絵を見るような光景を何度か眼にすることができた。これも飛行機でなく、列車にしたお蔭である。発車してからしばらく経って屋が近付いたとき、思いがけず昔の駅弁そっくりの折箱が配られ、お茶が添えられた。このツアーを計画した人の洒落た心づかいであった。有難く頂く。さて、海岸が近付いて、ドーバー海峡独特の灰白色の断崖が見え始めた。船はドーバーの街から少し先へ行ったフォークストーン(Folkestone)という港で乗ったように思う。大きさは青函連絡船と同じ位で、貨車はその儘レールを連結して積込むが人間は乗換えるという方式も青函連絡と同じである。国境通過の査証は船の一室へ係りが乗り込んでいて、そこへ船客が行列をして受けることになっている。船は1時間40分位でカレーへ着き、そこから再び鉄道の旅である。カレーからアミアンを経てパリ迄の200キロほどの車窓風景は、イングランドと違って、牧歌的な農家が適当に散在し、イングランドの蕭条な風景に対し、こちらは闊温といった親しみを感じさせる。やがてガール・デュ・ノール(北駅)へ着く。パリの北駅の感じは上野駅のように雑閑していて街のたたずまいも下町の気分がする。パ

スでホテルへ直行した。ホテルは凱旋門の近くのド・ゴール広場に建っている27階建てのオテル・ラファイエットである。今度のツアーの中では場所といい、建物といい、やっと一流のホテルへ泊れたわけである。しかも、パリ旧市街は5階以上の建物はないから、ここの17階の室の窓から外を見ると平たく5階の建物の海が眼下に広がっていて、遥か右前方にモンマルトルの丘が古墳のように盛り上り、その頂上にはサクレ・クール寺院が真っ白く、あたかも白鳥が飛び立とうとするように建っている。まさに絶景と言うところであった。私はホテルについては、このツアーのプロデューサーに始めからずっと不満を持っていたが、最後のパリで、一番宿泊期間の長い一週間をこの室を当てがわれて、いつの間にか鬱屈した不満が雲散霧消しているのを感じた。やはりツアーのプロデューサーもその辺のゴツを心得ているのであろう。パリ第1夜は満足して睡りに就く。

翌2日目は午前中市内観光、凱旋門から始まってエッフェル塔、シヤイヨー宮、ノートルダム、モンマルトル等、名の知れた処を一通り廻る。エッフェル塔は東京タワーを一廻り大きくしたようなもので左程驚かなかったが、驚いたのは凱旋門で、あれ程大きいとは思わなかった。日本の都市の中であれだけの雄大な感じのする建造物はないように思う。奈良の大仏殿が世界最大の木造建築として誇っているが、ちょっと雰囲気が違う。北京の紫禁城は私は未だ見てないので、それとの比較はできないが、とにかくあの凱旋門を取り巻くロータリーを走っている自動車が実に小さく、まるで玩具のミニカーのように思えたのが印象に残っている。もっとも廻りの建物が5階以下で揃っていることが一番大きな原因かもしれない。さて昼食は三越パリ支店から招待されてオペラ座近くの「さくら」という日本料理店でご馳走になった。午後はいよいよ待望のルーブル美術館を訪れるわけである。

18. ルーブル美術館

大英博物館と並んで、私の年来の念願であったルーブルを今、眼の前にして感慨新たなものがある。あのフランス革命で、ブルボン家の財産全部を国家に没収した国民議会は、1793年ルーブル宮を開放して、王家

の美術品を一堂に結集して美術館とし、広く国民に公開することを議決した。これがルーブル美術館の始めである。大英博物館に後れること40年であるが、エルミターージュ、メトロポリタン等に比べれば遥かに早いわけである。その後、一時ナポレオン美術館となったが、ナポレオンの没落とともにまた国家に接収されて現在に至っている。内容は王室のコレクションを中心にしているだけに美術品、殊に絵画の優品が揃っていることにおいては群を抜いているといつて決して過言ではない。彫刻にしても余りに多いので、あの戦後間もなく朝日新聞が門外不出のものを借り出したとして西洋美術館で一点だけ展覧して大評判になった「ミロのヴィーナス」も、私は第1回の入館のときは見落している、2日後に気が付いて、それを見るのが主目的で2回目の入館をしたほどである。その2回目のときまた、偶然のことから歴史的に有名なもので目玉展示品の一つを見落していたことに気付かされて、さすがの「松田式観察法」も物量の波に圧倒されてパンクしてしまっていたのだと思ひ知らされた。その目玉展示品とは世界最古の法典として有名なハンムラビ法典で、それを知らされたいきさつは次のようである。19世紀中ばから第二次大戦前にかけて、フランスは大英博物館と競って、メソポタミアを中心とする古代オリエン特地方に発掘調査隊を派遣して多大の成果を挙げ、夥しい資料を持ち帰った。現在もその楔形文字を刻んだ粘土板の解読研究が続けられているが、その調査の終わったものの中から主要なものが、ルーブルの一階東北角にある古代オリエン特室に展示されている。私はそのオリエン特展示室で、アッシリア、バビロニアの発掘品を見て廻っていたら「もしもし、あなたは日本の方ですか?」と声をかけられた。振り返って見ると若い日本人がカメラを持って立っている。「ハイ、そうですか?」というと、「私は中央大学で法律を学んでいる学生ですが、ここにあるこの碑に刻まれているのはハンムラビ法典といつて世界最古の成文法なのです。法律を学ぶ者として、この碑の前で記念写真をとりたいのですが、シャッターを押して頂けますか?」と逆にハンムラビ法典の説明を聞かされた。折角先方が素人だと思つて説明しているのに「私は知ってます」と話の腰を折ることはないので、そのまま聞いてシャッターを押してあげたが、こちらは「負うた子に浅瀬を教えられた」ようなもので内心忸怩たるものがあつた。私はこの頼みがなかったら、あの物量の波の中でアップ・アップしただけで終つて、このハンムラビ法典を

見過していたかもしれない。それでは、その問題のハンムラビ法典とはどんなものなのか、概略だけを述べておくと、あの有名なテグリス・ユーフラテス地方は古代から小王国がせめぎあっていたが、紀元前2千数百年頃バビロニア王朝が興つて、逐次統一王朝を拡大していたが第一王朝の六代目の王ハンムラビに至つてその国土は最大に達して殆んどメソポタミア全域に広がった。ハンムラビは晩年に大法典を編纂して公布したが、その全文を閃緑岩の石柱に刻んでシッパル神殿に建立した。それがフランスのド・モルガンを団長とする発掘調査隊によつて1884年に発見されたもので、その場所は現在のイラン領であるスーサであつた。しかし、後の研究によつてそこは最初の建立地・シッパル神殿ではなく、ずっと後にエラムの国王が戦利品としてスーサに持帰つたものであることが、伴出の粘土板の解読によつて判つている。それは、長さ2メートル余で切口が元の方で長径30センチ余の楕円形になっている柱状の閃緑岩でできていて、上方へ行く程細くなって先は円められている。その上部に、正義の太陽神シャマッシュから、ハンムラビが法のシンボルとして光筆を授かっている図がレリーフで描かれていて、それから下部は5ミリ角位の楔形文字が罫に区切られて、ピシシと並んで、アッカド語で刻まれている。この碑の建立年代は学者によつてまちまちで、まだ定説はないが、最近の資料によつて考証されたハンムラビ王の治政第一年为紀元前1728年とする説が有力になっている。これを他の文明圏と比較して見ると、中国で実証的に記録によつて確認されている最古の年代が殷王朝中期の王・武丁の頃であつて、それが紀元前1300年頃であるから、文献的にはメソポタミアの方が少し古いようである。エジプトは中王国が亡びて、新王朝が初まる少し前に当るが、成文法というものはまだ発見されていない。いずれにしてもハンムラビ法典は現存する世界最古の成文法であることは間違いない。そして、大英博物館のロゼッタ石に匹敵する目玉展示品であることも間違いない。その目玉が、室の中央に据えられているとはいえ、何の特別表示もない無雑作に他のものと変わることなく並べられているところにフランス人の氣質をかい間見たような気がした。

ルーブル宮は、シテ島で別れたセーヌの流れが再び合流した点の右岸に横たわっている細長い建物で、大体外から見るとコの字型をしてコの下の一辺をセーヌ河に添つて位置しているのである。ところが中へ入るとなかなか複雑で、コの上を繋ぐ豎の線のところが

実は一直線ではなく、既に中庭を持った四角い建物で、これ一つで上野の東博よりも大きいと思われる。それよりセーヌ添いに伸びたコの字の下辺の右半分位迄に中央の四角よりも称々小さい四角が二つ連続して並び、その外側の線に添って一辺が更に河添いに延長している。コの字の上の一辺も下と対象的になっているがこちらの方は大蔵省が使っていて、美術館はコの字の堅側と下辺とを使っている。それにしても複雑で細長く展開しているから端から端迄行くとしたら大変な距離である。そういうところが不便だという声が出たのか、3、4年前から新聞に書きたてられていたガラスのピラミッドは、どうやらそれが中央の入口になって、ここから地下道を通して放射状に自分の見たいと思う物がある室へ直行できるようになるらしい。今パリではそのピラミッドも引くくめて美術館関係の大改革が行われているが、そのことについては後で述べる。

さて、中央入口から入った私は入口から左方へ進み、サモトラケのニケに突き、左前方へ入り、彫刻室を通り抜けて、コの字の堅線をなす四角形の区画へ入ったらしい。入ったらしいとはたよりない話であるが、このとき私はルーブル宮の図面は全然知らずにやみくもに見て廻ったのである。先程私が知った風にルーブル宮の概略を説明したのは、実は私が帰ってから後に出た講談社のシリーズ・『世界の博物館』の第10巻・ルーブル博物館の見取図を見ながら説明したわけである。従って今から通って行く進路も、後から講談社本の見取図と記憶とを照合しながら書いて行くから、先程のように不確定な記述になることがある点をお許し頂きたい。それで、私はその四角い区画に特に記憶が鮮明なのは、そこがエジプト古代の美術品を展示してあったからである。古代エジプト美術に特に関心があった理由は、これまた松田氏から、氏が何ヶ月もエジプトに滞在して、制作技術に関して疑問がある点を苦心して解明した話を聞いていたからである。そんな関係で大英博物館ではナポレオンの収集したものを更に英国が持ち帰ったエジプトの美術品を見ることが主目的であったが、ルーブルへ来てこんなに優品があるとは思ってもいなかったので印象が鮮明なのに違いない。そこでエジプト美術を見終って一階のオリエンタ部門へ降りていったところで、先にお話したハンムラビ法典の撮影を頼まれることになるわけであるが、それは2回目に入ったときで、第1回目のときは殆んど素通り同様に2階の絵画室へ行った。

絵画室へ行って私はまたまた驚かないわけには行かなかった。その点数の多いことと大作の多いこと、全く私の想像を遥かに越えるものであった。ルネサンス期以前から始まって、バロック、ロココ、ロマンと各期の代表作が所狭しとばかりに犇き合っているさまは壯観といおうか、圧倒的と言おうか、まさに形容の言葉に窮するとはこのことである。しかも、私はコの字形下辺の四角が二つ並んだ区画までで時間が一杯になってしまい、入口から右のセーヌ河添いに長く延びた一辺の建物の方は見落していたのである。日本へ帰ってから講談社の「世界の博物館」第10巻「ルーブル博物館」の巻末略図を見て、そのコの字の形下辺の延長線上、入口より右の部分(2階)にはイタリア、フランドル、スペイン等の外国絵画室があったことを知ったのである。幸いなことに、私はそれらの外国は皆廻って本国の美術館は一通り見て来たので見聞に大きな穴が明くことは避けられたと思う。その上フランス絵画も印象派以後はルーブルに展示し切れず、別にコンコルド広場の一隅に接して印象派美術館があって、そこに作者別に室を区切って展示してある。それはブルュッセル視察後に入館したのでその時に詳説する。

こうして、各国を廻って、殊に美術館を主として見て来て、フランスが美術において如何に優れ、如何にボリュームがあるかに感嘆してしまった。まさに参った、という感じである。まこと芸術の都パリはルーブルを見ることによって頭の心まで洗脳されてしまった。明日はブリュッセルを訪れることになっているが、パリを見た後でブリュッセルを訪れることは、宮殿を見た後で過疎の地方都市を見るようなもので、全く気の毒なことになってしまった。

さて、ルーブルの評価であるが、星六つといたいところだが、それでは五段階に分けた意味がなくなるので、仕方なく星五つのトップクラスということにしておく。ただし、ルーブルが外の博物館と根本的に違うところがあることを説明しておかなければならない。世界のトップクラスの博物館として、私は大英博物館、ルーブル博物館、メトロポリタン博物館、エルミタージュ博物館の四館を重視しているが、そのうち、自国のものが展示品の支柱をなしているのはルーブルだけである。他の三館は皆他国のものが支柱をなしていることに注目する必要がある。英国が芸術の分野で大家を出していないことは、既に大英博物館のところで述べて置いた。その点ロシアは、文学・音楽においてはトルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフ等の

大作家、チャイコフスキー、リムスキー・コルサコフ、ムッソルグスキー等の大作曲家を輩出している。しかし絵画・彫刻においては巨匠が出ていない。これも国民的風土のなせる業で、文化史あるいは文化社会学の領域で今後研究すべき問題であろう。それについてアメリカであるが、アメリカは今、あらゆる分野で一大躍進の真最中であり、国が新しいだけに、文化的伝統が確立されていないが、将来は文化的にどのような所産が出現するか、楽しみな国である。メトロポリタンはその文化の培養土の役目を果たすであろう。

このようなことを思いながら、ルーブルを出ていつの間にかセーヌの岸に来ていた。そのセーヌの対岸、下流寄りにルーブルに似たルネッサンス式建物の相当大きいのがあった。よく見ると、最初の市内観光のときに説明されたオルセー駅の建物で、今は地下鉄ができたため廃駅となり、文化施設としての利用が考えられているとのことであった。そのときは大して関心を持たなかったが、つい先日、学会の例会として先にもちょっと触れた、フランス博物館群研究所々長クリスチャン・ラーニュ氏が講演された際、そのことも含めた現在進行中の博物館群改革プロジェクトを説明されて、その素晴らしさに驚嘆したのである。そのことは日本の博物館行政の参考にもなり、私の提唱している「博物館社会学」の参考にもなると思うので、その学会例会に出席されなかった方々のために概略を述べて置くことにする。

それは、本年（1988年）9月28日、午後6時から8時まで、秋葉原の丹青総合研究所で開催された学会の本年度第2回例会にラーニュ氏が講演されたものである。氏は現在、氏が所長として主宰するフランス博物館群研究所で進行中のプロジェクトとして次の5つを挙げ、スライドを映写しながら懇切に説明された。そのプロジェクトは次のとおりである。

1. ルーブル美術館の増改築
2. 近代美術館の創設
3. オルセー美術館の創設
4. ピカソ美術館の創設
5. アラブ世界インスティテュートの創設

どの一つをとっても、日本では10年・20年に一つあるかないかの大プロジェクトで、それが一度に5つも同時進行中とは、全く文化行政に対する考え方が日本と根本的に違うことに驚きさえ感じる。さて、その一つ一つについて概略説明を加えると、

1. ルーブル美術館の増改築

これは新聞でも屢々報道され、あのルーブル宮の中

庭にガラスのピラミッド様の構築物を建造することに、景観を壊す、と相当論議の種になったらしいが、景観の問題はともかくとして、この構築物の中には最新の技術を結集して、ボタン一つで展示物がどこに展示してあるか、それに至る経路等を知ることができるし、また他の操作をすれば展示物のデータが一眼でわかると、とにかく利用者に最大のサービスが提供されるようになるらしい。そうなれば世界で最高の博物館と稱してもいいものになるであろう。

2. 近代美術館の創設

フランスの税制がどうなっているかはしらないが、戦後の相続税で物納された美術品が莫大な数量になったらしく、それを整理して近代美術館を造るのだそうである。

3. オルセー美術館（印象派美術館の移転）

現在、ルーブル美術館に展示し切れない印象派時代の作品群は、コンコルド広場の横にあたるチュイルリー公園の隅っこにある倉庫のような建物を利用して、ルーブル博物館附属印象派美術館として、展示しており、私はそこを観たのであるが、今度の増改築でオルセー駅を改造して、これを印象派美術館とすることになり、目下大工事中であり、その工事中のスライドを数枚見せながら説明された。改造といっても殆んど改築に近い大改造であり、完成の暁は素晴らしいものになるであろう。

4. ピカソ美術館

ピカソはスペイン人であるが、デビュー以来パリで活躍し、パリで没した巨匠であるから、作品もパリに集中してあるのであろう、そのいきさつは聞き漏らしたがこれも建設中である。

5. アラブ世界インスティテューション

アラブ世界の文化を研究し、資料を収集し、展示する施設で、何故パリにこれを造るようになったかは、時間がなくて説明されなかったと思うが、とにかくスライドで見た限りでは途方もなく広大なものに思えた。以上でラーニュ博士の講演されたフランス最近の博物館事情を終って、パリへ話を戻すが今回は紙数も超過したので、パリ第3日目以後の記事は次回に譲ることにする。